

天を見上げた尾張の人びと

－ 江戸時代の天文現象と暦 －

今年は、華やかな天文現象を国内で見ることができる年です。5月21日の $\odot$ 環日食、6月6日の $\odot$ 星の太陽面通過、8月14日の $\odot$ 星食。 $\odot$ がつく天文現象が3つも見られることから、今年は天文ゴールデンイヤーとも言われています。また、今年は「うるう年」でもありましたが、7月1日は「うるう秒」が挿入される1秒長い1日となり、秋分の日が116年ぶりに9月22日となり、暦の面からも注目される年となっています。

そこで、当館所蔵の市史資料を始めとする江戸時代の資料を中心に、当時の天文現象や暦に関連することからをご紹介します。

江戸時代における日食

慶長6（1601）年から慶応3（1867）年の間に、日食の記録は100以上残っています^{1) 2)}。日食は、それだけ身近な天文現象であり、興味深いことがらであったとも言えます。

貞享5（1688）年の仮名頒暦には、日食の観測方法が書かれています³⁾。「板に口△○かくのごとく穴をうかってをく 日の光をとをすれば常に其かたちみな同也～（後略）」とあり、これはピンホールカメラの原理を利用した観察方法です。5月21日の金環日食を同じ方法で観察なさった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

太陰太陽暦では暦の性質上、日食は朔日（一日）に、月食は十五日前後に起こるようになっていきます。690年ごろから使われ始めた儀鳳暦の頃より、暦にも日食・月食の予報がされるようになります⁴⁾が、精度がそれほど高くない時代は、大目に予報されていた⁵⁾そうです。日食は不吉な事象とされ、明治の頃までは、予報にしたがって朝廷では廃朝、寺社では攘災の祈祷が行われていました^{6) 7)}。大目に予報しておけば、日食が起こらなくても神仏が攘災の願いを聞き届けてくれたこととなりますが、予報されない日食が起こってしまうと一大事でした。

4度の改暦

「暦法疏密驗在交食」とは「暦法の疏密の驗は交食に在り」と読み下し、「暦法の良し悪しは日食・月食の予報が当たるか否かにある」という意味です^{8) 9)}。つまり、日食・月食の予報が外れ始めると、改暦の機運が高まることになり、江戸時代には4回もの太陰太陽暦の改暦が行われました。まずは、貞観4（862）年から使用されてきた宣明暦から、貞享2（1685）

年に貞享暦へと改暦されます。この貞享暦は、渋川春海によって作られた日本人の手になる初の暦法でした。また、800年以上使用されてきた暦からの改暦は、当時大きな話題を呼び、近松門左衛門による「賢女手習并新暦（けんじょのてならいならびにしんごよみ）」や、天和3（1683）年の事件を題材にとった「大経師昔暦（だいきょうじむかしごよみ）」といった浄瑠璃が上演されました。また、井原西鶴による浄瑠璃で現存する唯一の作品である「暦（こよみ）」も上演されました。「賢女手習并新暦」と「暦」は近松門左衛門と井原西鶴の競作、竹本義太夫と宇治加賀掾の競演¹⁰⁾ ¹¹⁾ となり、一層話題を呼びました。

その後、宝暦5（1755）年から宝暦暦へ改暦しましたが、宝暦13（1763）年9月朔日の日食の予報に失敗¹²⁾ ¹³⁾ し、わずか16年で修正がなされます。

そして、寛政10（1798）年からは寛政暦へ、弘化元（1844）年からは天保暦へと改暦されました。いわゆる旧暦と言えば、天保暦をさします¹⁴⁾。天保暦は極めて精緻な太陰太陽暦と言われており、現在採用されている太陽暦であるグレゴリオ暦と比較しても、差はほとんどありません¹⁵⁾ ¹⁶⁾ ¹⁷⁾。ただし、この天保暦も、2033～2034年にかけてほころびが発生することが分かっています¹⁸⁾。

展示資料解説 〔 〕内は請求記号、[]内は翻刻資料名、

□内の上段は原文、下段は書き下し文

○『猿猴庵日記』〔市2-8-3 15才〕〔名古屋叢書17 p.199〕

高力種信（1756-1831、尾張藩士）は、『尾張名陽図会』などで有名です。絵入の日記として『猿猴庵日記』を残しており、やはり日食や月食の記録があります。

（天明五年） 七月 朔日日蝕ニ付 御家中出仕之輩 五ツ時以前登城有之様御觸 昨晦日 に廻る
（天明五年） 七月 朔日、日蝕に付き、御家中出仕の輩は、五ツ時以前に登城之有る様 御觸、昨晦日に廻る

展示しているのは、天明5（1785）年7月朔日の記録です。前日に、明日は日食なので、五つ時（今の8時頃）までに登城するように御触れが回ってきた、とあります。

○『鸚鵡籠中記』〔市8-1-1 6才〕〔名古屋叢書続編9 p.81〕

朝日重章（1674-1718、尾張藩士）は、26年超に及ぶ日記『鸚鵡籠中記』の中で様々な天文現象を記録しています。日食、月食そして金星食ま

で32の記録があります¹⁹⁾。

展示しているのは、元禄5（1692）年1月朔日午後1時～5時の日食の記録です。奥村徳義手沢本で、一部を抜粋した資料です。『名古屋叢書続編9』の底本には、徳川林政史研究所の自筆稿本が使われています。

元禄五壬申歳石嵩 正月大元日 晴空日蝕予照水鏡而視之。曆家には六分といへども、少二三分斗、未申之刻。 (中略) 朝廷。小朝拝。節会等停之。二日行之。
元禄五壬申歳石嵩 正月大元日 晴空に日食、予、水鏡に照らして之を視る。曆家には六分といへども、少なく二、三分ばかり。未申の刻。 (中略) 朝廷。小朝拝。節会等之を停め。二日之を行う。

朝日重章は水鏡にて日食を観察しており、曆家は六分と予報していたけれども欠けたのは二三分だった、とのこと。貞享の改暦から7年目のことであり、どれだけ欠けるか興味津々だったのでしょうか。日食は、地域により欠ける度合いが違います。『武江年表』²⁰⁾には、

正月元日、未申の時、日蝕（七分半）とありました。

朝廷は、行事を中止（廃朝）し翌日に行う、とあります。

○『鸚鵡籠中記』〔市8-1-4 66才〕[名古屋叢書続編12 p.194]

(正徳二壬辰年) 十一月二日 奇星月頭に出て月へ入 諸国同く見ゆ
(正徳二壬辰年) 十一月二日 奇星、月頭に出て月へ入る。諸国同じく見ゆ

同じく、朝日重章の『鸚鵡籠中記』から、正徳2（1712）年11月2日の記録です。「奇星」が、三日月よりも細い二日目の月に入ってしまったとあります。『続史愚抄六十八』²¹⁾にも記事があります。

二日壬午。有星入月。月蝕星也。

「奇星」とは金星のことで、朝日重章の見た金星食の記録です^{19) 22)}。

○『正事記』〔市2-37-3 45ウ～47才〕[名古屋叢書23 p.392]

津田房勝（1629-1701、尾張藩士）が著した『正事記』は尾張の随筆としては最も古いものです²³⁾。後日追記した寛永14（1637）年から寛文2（1662）年までを記録しています。

(万治四年辛丑) 一、當年出来星有之由申ならず (中略) 萬治四年自正月十日比當寅卯方有星 如左自寅刻至卯初刻 (中略) 此星号虎尾星 (中略) 余も折々心懸屋上ニ登り東方を見けれ共 或ハ時刻の違ひや又は曇りなとして見さりけり
(万治四年辛丑) 一つ 當年、出来星有りの由、申しならず (中略) 萬治四年、正月十日ごろより當寅卯の方に星あり 左の如く寅刻より卯初刻に至る (中略) 此の星、虎尾星と号す (中略) 余も折々心懸けて屋上に登り、東方を見けれども、或いは時刻の違ひや、又は曇りなどして見えざりけり

展示しているのは、万治4（1661）年正月10日頃、東北東の方角に図のような虎尾星が現れたとの林春斎（1618-1680）の報告書の写しを、津田房勝が記録したものです。虎尾星は兵乱の主星であると書かれていますが見たという人がおらず、様々な噂が流れるだけで房勝自身も残念ながら見られなかったとのことでした。

○『萬治日記』〔市 8-125 37ウ～38ウ〕

小笠原長昌（?-1714、尾張藩士）の日記『萬治日記』には、火事の記録が多く残されています。その中に、寛文4（1664）年の彗星についての記録があります。

(寛文四年辰之年) 一 十月 巽ニ當リ星有如左彗星と云々 (中略) 此星ニ付當冬雜説申 (中略) 當十二月七日八日上方筋名古屋つよき雪ふて間此雪星たらんかと申 其外色々ニ沙汰無止時
(寛文四年辰之年) 一つ 十月、巽に當り、左の如く星あり。彗星と云々 (中略) 此の星につき、當冬雜説申す (中略)

當十二月七日八日、上方筋と名古屋につよき雪がふりて間この雪星たらんかと申す。そのほか色々に沙汰、止む時無し

南東の方角に図のような帚星が現れたとあります。11月初めには尾の長さが十間（約18m）程にも見えたそうです。この星についての風説がいくつか挙げられており、来年の麦の出来はよいはずだ、將軍さまのところでは若様が誕生するだろうなど良いことから、12月7、8日に京都と名古屋で大雪が降ったのは帚星のせいだといった凶事まで挙げられています²⁴⁾。

『摂陽奇観』²⁵⁾には、

十月客星午方にあらはれ月を越えてやむとあります²⁶⁾。

○『星名考』〔河セ-33 序2才〕

山本格安（?-宝暦中、天野信景門の国学者）の著作『星名考』は、星の名前を考証したもので、延享元（1744）年に刊行されました。

混殺名非其星 星非其名 正之者其星學之本歟

混淆の名は其の星に非ず。星は其の名に非ず。

之を正すは其れ星学の本か。

とあるように、間違った星の名前を正しくするのは星学の基本ではないかと、星の名前の混乱を糾そうとする目的で書かれています。肉眼をたよりにした1480星のうち、40あまりの星を考証しているそうです²⁷⁾。

○『理学入式遠西観象図説』〔市3-12 50ウ～51才〕〔名古屋叢書13 p.23〕

吉雄南臈（1787-1843、尾張藩奥医師）の講義を筆記した『理学入式遠西観象図説』は、文政6（1823）年に初版が出ています。3冊からなり、12の天象図や、日月蝕、土木金及其衛星之蝕などについて説明されています。江戸時代末期の最もポピュラーな天文学の啓蒙書であり、地動説が取り入れられています²⁸⁾ ²⁹⁾ ³⁰⁾ ³¹⁾。

展示しているのは、第3図です。

太陽八天ノ中心ニアリ 地ハ五星ト共ニコレヲ旋回ス

とピタゴラスの説に基づいたコペルニクス作製の図として紹介されています。

○「天説弁」 『植松茂岳 第一部』〔NA12/7/1〕 p.329-341

植松茂岳（1794-1876、尾張藩国学者）は、服部中庸（1757-1824）の『三大考』に反論して『天説弁』を文化13（1816）年に著し、これに平田篤胤（1776-1843）が『天説弁々』で意見を述べ、さらに植松茂岳が『天説弁々の弁』を著しています。「日即天照大神、月即月読命」

という説についての国学者同士の言葉上の論争ですが、鈴木脰（1764-1837、尾張藩儒者）らをも交えてかなり大きな波紋を巻き起こしたようです^{32) 33)}。
展示しているのは「天説弁」の冒頭ですが、同じ資料の中に「天説弁々反論」も収録されています。

○『寛政十三年かのとのとり乃寛政暦』〔わ 449／19〕

寛政 12（1800）に発行された寛政暦です。展示しているのは、残念ながら日食の予報ではありませんが、8月 15 日に「月帯そく」とあり、月が欠けながら出てくる月帯食が予報されています。

月帯そく とりの四刻二分餘かけなから出 とりの五刻右の上ニおはる 西國にてハ見へかたかるへし
月帯食 酉の四刻、二分余り欠けながら出、酉の五刻、右の上におわる 西國にては、見えがたかるべし

酉の四刻に二分余り欠けながら出てきて、酉の五刻右の上に終わる。西日本では見えにくい、という予報です。実際はどうだったのか気になるところですが、江戸浅草の天文台始め曇天で観測できなかったようです³⁴⁾。

○「後は昔物語」

『日本随筆大成 第3期12』〔N081/67/3-12〕p.269より秦滄浪（1761-1831、明倫堂教授）の大小暦を紹介します。

大小暦とは、その年の月の大小の順を簡便に表現したもので、俳句や錦絵など様々な種類があります³⁵⁾。太陰太陽暦では毎年、大小の月が違いました。現在では大小の月は毎年同じですが、「西向く土（2・4・6・9・11）」が小の月を覚える語呂合わせとして使用されています。

てがらのをかもち（手柄岡持、1735-1813）作『後は昔物語』で取り上げられている大小暦の一つに、「尾張の儒者秦鼎」の作品が紹介されています。

秦鼎は、秦滄浪といい、文政6（1823）年の大小暦として「昴」の字を挙げています。縦の画は大の月、横の画は小の月とし、「昴」を書いてみると、大小大小小小大小大小大となります。

《引用文献》

- 1) 『明治前日本天文学史 新訂版』、日本学士院／編、野間科学医学研究資料館、1979、p.427
- 2) 『近世日本天文学史 下』、渡辺敏夫／著、恒星社厚生閣、1987、p.619-623
- 3) 文献2、p.631

- 4) 『國史大辭典 11』、吉川弘文館、1990、p.52
- 5) 『日本の暦 | 旧暦と新暦がわかる本』、岡田芳朗／編、新人物往来社、2009、p.136
- 6) 『近世日本天文学史 上』、渡辺敏夫／著、恒星社厚生閣、1986、p.151
- 7) 『旧暦読本 | 現代に生きる「こよみ」の知恵』、岡田芳朗／著、創元社、2006年、p.50
- 8) 文献1、p.411
- 9) 文献2、p.619
- 10) 文献5、p.74
- 11) 『傑作浄瑠璃集 上』、樋口慶千代／著、大日本雄弁会講談社、1935、p.604
- 12) 文献6、p.151-155
- 13) 文献1、p.277-278
- 14) 『暦』、広瀬秀雄／著、東京堂出版、1993、p.96
- 15) 『國史大辭典 9』、吉川弘文館、1988、p.1023-1024
- 16) 『國史大辭典 6』、吉川弘文館、1985、p.52-53
- 17) 『おもしろくてためになる暦の雑学事典』、吉岡安之／著、日本実業出版社、1999、p.137
- 18) 『20世紀の暦 | 朔望万年暦』、黒坂紘一、光村推古書院、1994年、p.284-285
- 19) 『鸚鵡籠中記に記録された天文現象』、[平沢康男／著]、[平沢康男]
- 20) 『定本武江年表 上』、[斎藤月岑／著]、筑摩書房、2003、p.215
- 21) 『国史大系 第15巻 新訂増補 新装版』、黒板勝美／編輯、吉川弘文館、2000、p.397
- 22) 『国史国文に現れる星の記録の検証』、斎藤国治／著、雄山閣出版、1986、p.77
- 23) 『稀書珍書 忘れじの尾張本』、市橋鐸／著、愛知県郷土資料刊行会、1983、p.188-194
- 24) 文献23、p.174-175
- 25) 『浪速叢書 第2』、船越政一郎／編、名著出版、1977、p.205
- 26) 文献2、p.716-717
- 27) 『なごやの本』、市橋鐸／[著]、名古屋市経済局貿易観光課、1962、p.5
- 28) 文献6、p.280-285
- 29) 文献27、p.15
- 30) 『國史大辭典 第2』、吉川弘文館、1980、p.406
- 31) 『日本思想大系 第65』、岩波書店、1972、p.53-165、p.466-473
- 32) 文献6、p.333
- 33) 『植松茂岳 第1部』、植松茂／著、愛知県郷土資料刊行会、1982、p.57-74

34) 文献1、p.405

35) 『國史大辭典 8』、吉川弘文館、1987、p.780

《参考・参照文献》

『明治前日本天文学史 新訂版』『近世日本天文学史 上・下』『日本・朝鮮・中国日食月食宝典』『理科年表 第85冊』『暦象年表 平成24年』『名古屋叢書 17』『名古屋叢書続編 9』『名古屋叢書続編 12』『名古屋叢書 23』『名古屋叢書 13』『國史大辭典(1979-1997)』『三百藩家臣人名事典 第4巻』『尾張著述家綜覧 補訂版』『国書人名辞典』『近松全集 第2巻(1925)』『近松全集 第9巻(1988)』『国立劇場上演資料集259』『定本西鶴全集 第9巻(1977)』『日本名著全集 江戸文芸之部 第6巻』『傑作浄瑠璃集 上』『系統別歌舞伎戯曲解題 中』『江戸の絵暦』『総務省ホームページ うるう秒挿入のお知らせ

(http://www.soumu.go.jp/main_content/000144097.pdf)

2012.06.15確認」

名古屋市鶴舞中央図書館
平成24年6月発行